安吾雑報

第96号

発行日：2026年5月10日　発行所：安吾の会　世話人代表・発行人：齋藤正行　編集長：西山寛子
共同代表：小川弘幸　事務局長：久志田渉　会計・発送：高見美智子　街歩き：渡邊充
事務局／新潟市中央区八千代２－１－１「新潟・市民映画館シネ・ウインド」内　TEL025-243-5530　FAX025-243-5603　題字・渡邊秀英

※安吾の会は、Ａ（ＡＮＧＯ）プロジェクトとして一九八六年一〇月二〇日に発足、その翌年一〇月二〇日に安吾の会となりました。

金森穣が挑む安吾とサティ
Noism Company Niigata
最新作「私は海をだきしめていたい」公演迫る！

新潟市が世界に誇る、日本唯一の劇場専属舞踊団「Ｎｏｉｓｍ Ｃｏｍｐａｎｙ Ｎｉｉｇａｔａ」。安吾の会世話人代表・齋藤正行始め、シネ・ウインドや安吾の会は04年のＮｏｉｓｍ設立以来、その活動を応援して来たが、齋藤は以前からＮｏｉｓｍ芸術総監督・金森穣さんに、「坂口安吾が原作の作品を作って欲しい」と伝えてきた。その言葉が実を結び、安吾生誕祭１２０関連イベントとして、Ｎｏｉｓｍ０＋Ｎｏｉｓｍ１最新作「私は海をだきしめていたい」（同時上演　改訂版「春の祭典」）が世界初演される。

金森さんはこれまでも「カルメン」や「ラ・バヤデール」といったオペラを原作と音楽を読み解いて再構築する「劇的舞踊」シリーズや、別役実の戯曲に基づく「マッチ売りの少女」といったＮｏｉｓｍ作品、来年パリ公演が予定されている東京バレエ団「かぐや姫」などを手掛けているが、安吾の作品世界を舞踊化するという試みにおいて題材に選ばれたのは、その短編「私は海をだきしめていたい」だった。安吾作品に繰り返し登場する「肉体の喜び」を知らない女と、その女の肉体を欲する男との相克を、切なく透き通るような文章で綴った「恋愛小説」である。更に音楽として使用されるのは、安吾が深く影響を受けた作曲家エリック・サティのピアノ曲である（サティも今年が生誕１６０年にあたる）。金森作品は、音楽と舞踊家の身体とが寸分隙なく共振し合う点に醍醐味があるが、安吾が描く男女の精神と肉体の愛憎を、サティの調べに乗せて如何に「舞踊詩」として見せてくれるか、期待に胸が高まる。

齋藤は、「今回のＮｏｉｓｍは全公演を満席にしよう」と宣言し、４月24日の新潟日報紙に坂口安吾生誕１２０年とＮｏｉｓｍ公演をＰＲする全面広告を皆さまのご協賛のもとで掲載するなど、Ｎｏｉｓｍと協力しつつ広報を展開している。新潟独自の舞踊団Ｎｏｉｓｍが、新潟という土地の精神の深奥を象徴する坂口安吾を舞踊化するという、他に類のない試みが遂に実現する。皆さま、万難を排して劇場へ足をお運びください！

▲4月24日新潟日報全面広告

1906-2026
坂口安吾
生誕祭
120

Ｎｏｉｓｍ０＋Ｎｏｉｓｍ１
「私は海をだきしめていたい」／
改訂版「春の祭典」

期日：６月27日（土）17時
６月28日（日）15時
７月４日（土）15時
５日（日）15時

会場：りゅーとぴあ　新潟市民芸術文化会館〈劇場〉

料金：全席指定５，５００円
Ｕ25（25歳以下）３，０００円
高校生以下１，０００円　税込み

問合せ：りゅーとぴあチケット専用ダイヤル
０２５―２２４―５５２１
（10時～17時、休館日除く）

埼玉公演あり：７／25（土）15時
７／26（日）15時
彩の国さいたま芸術劇場〈大ホール〉

６月27日（土）10時～
安吾ゆかりの地街歩きあり
案内人：坂口綱男
申し込み：安吾の会
０２５―２４３―５５３０
久志田渉

「安吾名誉市民にする会」報告

設立趣旨　なぜ今 安吾なのか

新潟が生んだ文豪・坂口安吾は、その文学と思想を通じて、戦後日本の精神的風土の形成に大きな影響を与えてまいりました。

権威や既成概念に安易に依拠することなく、「自由とは何か」「個として生きるとはどういうことか」、そして「そこに伴う責任とは何か」を、鋭く、そして誠実に問い続けた思想家であったと、私たちは考えております。

その問いかけは、時代を超えて、混迷の時代を生きる私たち、そして次の世代にとって、今なお大きな示唆を与え続けています。

こうした坂口安吾の功績と思想は、単に1人の作家の業績にとどまるものではなく、郷土新潟が誇るべき、かけがえのない文化的遺産であります。これを正当に評価し、顕彰し、次世代へと継承していくことは、地域文化の振興に資するのみならず、地方から文化を創造し、発信していく上でも、極めて重要な意義を持つものと考えております。

また将来に向けては、坂口安吾に関する多様な資料を体系的に収集・保全し、展示・発信できる拠点の構想も、大きな課題であると認識しております。

このような思いから、私どもは、坂口安吾の名誉市民顕彰を目標に掲げ、市民の皆さま、企業・団体の皆さまと力を合わせて取り組むため、本日ここに「坂口安吾を名誉市民にする会」を設立する運びとなりました。

本日の総会が、その第一歩となります。

どうか皆さまにおかれましては、本会の趣旨にご理解とご賛同を賜り、今後とも温いご支援とお力添えを賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

令和8年1月31日

坂口安吾を新潟市名誉市民にする会

呼びかけ人　平山　征夫

「坂口安吾フォーラムIN新潟」

坂口安吾を新潟市名誉市民へ
その理念と可能性を考える

開催場所：日報ホール（メディアシップ2F／新潟市）

開催日時：令和8年7月4日（土）
開場　13時30分　開演　14時

フォーラム構成：

第一部
基調講演　荻野アンナ
演題「アイ・ラブ安吾」
―安吾は現代も生きている―

▲荻野アンナさん

第二部
パネラーによるディスカッション
ファシリテーター
篠田昭　元新潟市長
パネラー
荻野アンナ　作家
七北数人　作家
森澤真理　新潟日報社特別論説編集委員

※入場料は無料。先着順200名で定員となります。

新潟市長表敬

令和8年3月9日

1906-2026
坂口安吾
生誕祭
120

こわれ者の祭典　新潟公演
坂口安吾生誕祭120前夜祭
堕ちることから始まる物語

アルコール依存症、摂食障害、引きこもり、ノイローゼ…、私とは違うと思っていたのに、舞台上から聞こえてくる話は、「私もそう思ったことある」というものだった。私も、人生のこれはどん底だなと思った日があったし、親に対してもうしわけない、こんな私じゃだめだと思い続けた日があった。今も、そういう思いから脱却できたとは、断言できない。私の思考の地層のどこかにある。私も、こわれもの。

今回は、坂口安吾生誕祭の一環としての開催で、新潟・市民映画館シネ・ウインド代表齋藤正行氏も登壇した。月乃光司さんお手製の安吾のお面をかぶって。安吾は精神の病と共に執筆活動を行った。こわれものの祭典メンバーも、自己を表現しながら生きている。「どん底と共存してく」「また落ちるのは怖いからどん底から1センチ上にいる、そこをキープしていく」というメンバーの発言があったが、どん底との共依存によって、強い個性の表現があるのだと感じた。

斎藤氏の中には、安吾が生きていて、するすると安吾の言葉が出てくる。「安吾をおもちゃにして」生誕祭を盛り上げ、大好きな新潟という街をもっともっと面白くしたいとたくらんでいるようだ。

シネ・ウインド会員　渡辺　裕子

▲こわれ者の祭典新潟公演　令和８年3月1日

桐生市安吾忌参加の記

第34回桐生市安吾忌の集いは、２０２６年２月28日に桐生鉾座で行われた。以下に概要を記す。

第一部は地元高校生による発表である。最初に「花咲ける石」を3人がリレーで朗読した。堂々とした朗読だった。続いての「坂口安吾に馳せる　続・堕落の間」は、架空の建造物の設計を３Ｄでみることができるものであった。

第2部は、漫画家の近藤よう子氏（新潟市出身）より「安吾を描く」と題する講演である。安吾を読んだのは大学で友人から勧められてからのことでやや意外な感じを受けた。また、新潟の気候や風土と、「吹雪物語」などにみられる描写についてのお話が印象深い。

その後、懇親会、2次会と流れる中、「桐生や東京では『安吾さん』と呼ぶが、新潟の人は『安吾』と呼んでるね」と発言があり、その理由について話したり、安吾が地元郷土史家の方々との古墳巡りの際に土器や石器を拾ったことなど興味深いお話をお聞きしたりと大変充実した時間を過ごすことができた。

最後に、このような機会を与えてくださった齋藤代表をはじめ、皆様に感謝の意を表したい。

諌山　えりか

▲坂口安吾千日往還の碑

濃密なる虚空
桜の森の満開の下二題

4月18日（土）、ふたつの「桜の森の満開の下」が新潟市内で口演された。まずは、アートミックスジャパン２０２６にて、浪曲師・玉川奈々福さんと曲師・広沢美舟さんが、24年「坂口安吾生誕祭１１８」で初演した浪曲版「桜の森の満開の下」を、再び新潟で演じてくれた（会場：りゅーとぴあ　能楽堂）。奈々福さんは、昨年の東京・観世能楽堂での公演始め「桜の森…」を繰り返し演じ、「難しいけれど育てていきたい作品」と仰っている。奈々福さんの絶唱というべき節と啖呵、夢幻のように自在な美舟さんの三味線は、「桜の森…」の女と山賊を包み込む虚空を描き切り、精緻に磨き上げられた「新たな古典」の誕生を再確認して幾度も落涙した。同公演では、新潟市出身の立川らく萬さんも、安吾の「落語・教祖列伝　兆青流開祖」に基づく新作落語「兆青」を披露。昨年の新潟初演時のあるハプニングを活かした構成や、主人公ホラブンの「チョーセイ」の言い回しの変化など、原作を芸能に昇華する為のたゆまぬ錬磨に唸った。

そして、同日の昼夜、シネ・ウインドでは俳優・加藤翠さんの語り、中川ゆかりさんの歌・二胡による「桜の森の満開の下」が公演され、いとうゆういちさんの照明、今井麻衣子さんの音響も相まって、現実とは思えないほどの妖気と虚空が現出した。師匠・千賀ゆう子さん（18年没）の魂を継承しつつ、加藤さん独自の妙なる音声表現で女の残酷な美を見せつけ、抜群の相性である中川さんの二胡の調べは、安吾が描く中世の物語に、遠い世界のどこかのような普遍性を加えたのだ。あまりにも濃密な二つの「桜の森の満開の下」。そして本誌1頁記載のとおり、6月は、Ｎｏｉｓｍが新作「私は海をだきしめていたい」で、また新たな安吾作品の舞台化に挑む。刮目してお待ちください。

久志田　渉

1906-2026
坂口安吾
生誕祭
120

安吾からひらく異端の思考――『異端の精神史』刊行に寄せて

このたび『異端の精神史――坂口安吾と河上肇、そしてデカルトへ』を同時代社から刊行いたしました。本書は、坂口安吾の仕事に導かれながら、戦後日本において見えにくかった「異端」の位置をたどり直したものです。安吾は、天皇制をめぐる重い正統性を、正面から否定するのではなく、ずらし、崩し、ときに笑いとして引き受けることで、私たちに距離の取り方を示しました。その手つきに触れることで、私たちは自ら考える足場を得ることができます。本書では、河上肇の構造への視線や、大江健三郎の身体的な緊張の感覚にも触れつつ、安吾において神話を外す回路を見出しました。ささやかな試みではありますが、本書が安吾を読み返す一つのきっかけとなれば幸いです。安吾読書会での報告・討論が執筆の下敷きになっています。

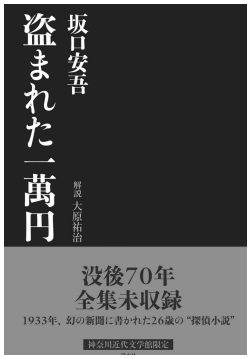
齋藤良助（安吾の会　会員）

▲異端の精神史表紙

『盗まれた一萬円』刊行

書籍はおろか、全集にも収められていない文学作品を発見・発掘し、後世への継承を目的とする文豪稀少作出版レーベル「漱文庫」（深水社発行）が立ち上がり、その記念すべき第一作として、坂口安吾『盗まれた一萬円』（解説・大原祐治）を刊行しました。文学館や記念館等、作家ゆかりの地でのみ限定販売をすることで、文学と地域の活性化を目指します。昨年、神奈川近代文学館「没後70年　坂口安吾展　あちらこちら命がけ」でスタートした本作は、会期後半からの販売スタートにもかかわらず、約100冊を完売することができました。本年は「坂口安吾生誕祭120」限定で発売いたします。大原教授が発掘した全集未収録作「盗まれた一萬円」（一九三三年）のほか、故郷新潟を舞台とする三篇を合わせた特別な一冊となりました。

深水社代表　深谷冬青



▲盗まれた一萬円表紙

【書名】盗まれた一萬円
【著者】坂口安吾
【解説】大原祐治（学習院大学教授）
【定価】5，995円（本体5，450円）
【紹介文】
1933年、幻の新聞に書かれた安吾26歳探偵小説〝。
【収録作品】
・盗まれた一萬円［全集未収録］
・ふるさとに寄する讃歌
・黒谷村
・逃げたい心
【ISBN】
978-4-911556-00-9
【発行】深水社（漱文庫）
https://sou-archive.jp/
https://sou-archive.jp/step4/
【発行日】2025年10月20日
【仕様】四六判／上製本／136ページ

新津駅前に!!

▲新津駅前碑令和7年9月4日　薬科大学キャンパスより移設

会は年会費、寄付、出版社の売上げで運営されています（年会費は三〇〇〇円です）。郵便振替は「〇〇六九〇―六―三九六三『安吾の会』」宛にお願い致します。

事務局長　久志田　渉

編集後記

「坂口安吾生誕祭120」の総合パンフをお送り致します。一年間、奮って参加お願いします。また、新情報は、是非情報共有お願いします。

サイトウ　マサユキ

丙午の記念すべき今年、いよいよ生誕祭が始まり、イベントや書籍刊行が目白押しですね。皆で生誕祭イヤーを楽しみましょう。

西山　寛子

1906-2026
坂口安吾
生誕祭
120

※安吾の会の年会費は三〇〇〇円です。郵便振替は「〇〇六九〇―六―三九六三『安吾の会』」宛にお願いいたします。